



日本記者クラブ  
囲む会

# 悪いことは良いことのためにしかやっこない

黒沼ユリ子さん

バイオリニスト

2012年6月7日

1980年からメキシコ市でアカデミア・ユリコ・クロヌマを開き、音楽家やバイオリンを愛する人を育ててきた黒沼ユリ子さんが、32年間続いたアカデミアを閉幕することを決断した。一時帰国中の黒沼さんは、生徒の父母から頼まれて住宅でスタートした「寺子屋」授業から、メキシコ政府の無料音楽教育システム、東欧から流入した音楽家が始めた音楽家庭教師に至るまで、アカデミアの歴史と環境の激変を語った。DVD映像でメキシコの音楽や教え子の演奏を聴きながら、話はメキシコ人気質やアメリカの麻薬にも広がった。あきらめないで続けてきた思いを尋ねると「悪いことは良いことのためにしかやっこない」とメキシコのことわざを紹介し、「マイナーな条件をいかにメジャーにするか」と取り組んできた歩みを振り返った。

司会：中井良則 日本記者クラブ専務理事・事務局長

日本記者クラブ Youtube チャンネル

<http://www.youtube.com/watch?v=JX8D2c8m9GI&feature=plcp>

©公益社団法人 日本記者クラブ

**司会：中井良則（日本記者クラブ専務理事・事務局長）** きょうはゲストに、メキシコから黒沼ユリ子さんをお招きしました。黒沼さんは、旭日小綬章の叙勲を受けられまして、その伝達式のため、一時帰国されております。

ご存じのように、メキシコで1980年からアカデミア・ユリコ・クロヌマというバイオリンと音楽の音楽学院をずっと長くやっていらっしゃいましたけれども、このたび終止符というか閉幕の決断をされたと伺っております。

きょうは、その黒沼さんにアカデミアのことや、さらにもっと話を広げて、いまのメキシコ、あるいは日本や世界のことを含めて、ご自由にお話をしていただいて、その後、皆さんの質問に答えさせていただきます。

ということを前置きにして、よろしくお願いたします。

**黒沼ユリ子・バイオリニスト** 皆さん、こんにちは。今日はようこそお忙しい中、おいで下さりましてありがとうございます。

ここは懐かしい、懐かしい日比谷公園の隣です。日比谷公園には日比谷公会堂が中心のポイントみたいにあります。それは私にとって本当に懐かしい場所なのです。私が14歳の時に毎日・NHKコンクール（現在の日本音楽コンクール）の本選でドキドキした時の楽屋も楽屋への階段も、そのままあって、私にとっての日本での音楽への出発点みたいところなので、今ここに来られたことを大変うれしく思っております。

まず、やはり何といっても昨年の3月11日のあの震災のことを。私たちは太平洋を隔てた向こう側のメキシコにいても大変驚愕しましたし、一体何が自分たちにできるかということで、オロオロしておりました。

それでは映像をお願いいたします。

一週間考えあぐねたり、友人たちと相談したりしまして、やっと会場を見つけました。ホールはメキシコの国が持っているナショナル芸術センターの敷地内で、中には音楽、美術、舞踊、演劇、文学ほか、すべての芸術分野の活動のための建物がありまして、そこには学校があったり、ホールや劇場もあります。そこでメキシコの音楽家たちに声をかけて、マラソンコンサートを行いました。

### 手弁当のマラソンコンサートで日本支援

これは午前11時から夜8時まで9時間にわたるマラソンコンサートだったのですが、メキシコの音楽家の友人たちに電話なりメールなりで声をかけましたら、2日か3日で「もうあなたが出演する時間はないわよ」と断らなければならないくらい大勢の方たちが賛同してくれました。当然、手弁当で、無料出演で、しかも前日、何百キロも離れた遠い町で演奏会がある人が、翌朝早く起きて

車を何時間も運転して飛んで帰って来たり、その日に本当は午前中に飛行機に乗らなければならなかった人が、夕方の便に飛行機を変更して演奏してから行くから、なるべく早く弾かせてちょうだいとか、そういうような人たちの集まりで、合唱団、オーケストラを入れますと総勢200人ぐらいのメキシコの音楽家たちが日本のことで心を痛め、何とかできないだろうかという思いで、このマラソンコンサートに参加して下さいました。

ほかにも沢山いろいろな方がいろいろな活動をなさいました。中には高い入場料をとって、高い収益を上げたコンサートもありましたけれども、私たちは、高い入場料といいますか、高い寄附金を出せないで聴けないという人がないように、入場は無料にして、本当に手づくりで、私たちの周りの人がすべてのものを作りました。例えば、ここには映っていませんけれども、ロビーに置きました募金箱も4リットル入るヨーグルトのバケツみたいなものに赤十字のマークをつけて、蓋に募金していただく穴をあけ、でも、コインが入るだけの穴では寄附金が集まりませんから、そして中には、いくら入れるかというのを見られては恥ずかしいという方もおありになると思って、入場者全員に入り口で封筒を配りました。その封筒に、20ペソの方もあれば、5,000ペソの方もあるという感じでお金を入れてから募金のバケツに入れていただきました。ですから入場で上げた義援金の額はそれほど大きくありませんでしたけれども、9時間の間ホールは常に満席で、いったん出た方が、またお昼を食べて戻ってきたり、また日本の消防法と同じように空席がなければ次の人が入れないので、ホールの前に沢山の人が待っていて、3人が出たら3人が入るというような感じで、夜の8時半、9時までマラソンのコンサートをいたしました。

### 心と心がつながる関係 日本とメヒコ

この映像は、私共のアカデミアの生徒たちで、その日に来られる子だけが集まって弾いたのですけれども、ステージの後ろに「メヒコ（メキシコ）、今日は日本のために」という横断幕をつくってかけてあります。後ろの方にあります。

それは何故かと言いますと、1985年にメキシコには凄い大地震があったのです。その大地震の時に日本の沢山の方から援助の声と、義援金と、人々もいらして下さったりして、応援して戴いたという恩義をメキシコ人は感じて忘れていなかったのです。ですから、今日は、今度こそメキシコが日本のためにということで皆が立ち上がったのです。

でも日本で1923年の関東大震災の時にはメキシコが他の国をさておいて、多分1番か2番目に、すぐに義援金を送ったという歴史もあるらしいのです。それもあって、地震が絆となっているというのはちょっと悲しい話ですが、日本とメキシコはそういう風に、何か事が起こりますとパッと心と心がつなぎ合わされるというような関係にある

のではないかと思います。

このコンサートには在メキシコの日本大使、当時の小野正昭大使もおいで下さって「日本国民の名において、メキシコの音楽家の皆さんに感謝します」とお礼のご挨拶を述べて下さいました。そして、これを少し早送りして下さいと出て来ますけれども、メキシコの小学生たちが日本の子どもたちに同情したり、連帯したり、そして“頑張れ”というような絵を沢山描いたので、それをホールの壁に投影しましたが、それは本当に感動的なものでしたし、その原画をロビーにも飾って、聴衆の皆さんが終演後にも観て下さったりしました。

### レッスンが途絶えないように塾を

アカデミア・ユリコ・クロヌマというのは、今（司会の）中井さんが仰ったように、1980年に創ったのですが、それは当時、——その10年ぐらい前から私はメキシコに住んでいたのですが——メキシコではまだその頃は、少年少女と言いますか、幼児にバイオリンを教えるという文化がなかったのです。つまりメキシコでは、分数バイオリンと言うのですが、小さな楽器を大量生産していなかったの——今もしていません——個人的にバイオリン製作者が、誰かから頼まれて小さなバイオリンを作ったりはしますが、小さなバイオリンを製造しているような工房や工場などもなかったのです。バイオリンという楽器は、“4分の4”と私たちは言っていますが、スタンダードのバイオリン、つまり大人が使うバイオリンのサイズを持てる年齢になった子どもが12〜13歳になってから始めるもの、と誰もが思っていた音楽文化だったのです。

やはり弦楽器の演奏は非常に微妙で難しいので、小さい時から練習を始めた方がよいことを、日本でも実証されていましたし、私は何とかしたいと思っていました。そして、たまたま私の知り合いの人たちの子供たちが何人か、私のところにプライベートの生徒として来ていたのです。私は当時、国際的に演奏旅行ばかりしていたので1年12ヵ月メキシコには居なかったものですから、親御さんたちが、何とか私が演奏旅行で留守の間でもレッスンが途絶えることのない様に、アカデミア方式と言いますか、日本で言えば塾と言うか寺子屋と言うか、そういう小さな学校のことですけれども、先生が複数になって、常に生徒はレッスンが続けられるような、そういうシステムを作ろうではないですか、と私に持ちかけて来られたのです。

### 楽譜のノタなら解かるけれど

メキシコでは、買い物をした時に何がいくらでと書く領収書のことを「ノタ」と言うのですけれども、音符のことも「ノタ」と言います。私は楽譜の方の「ノタ」は解かりますけれども、出納簿ですね、つまり収入と支出で残高が幾らとか、というような会計のことなど、そちらの「ノタ」は解からないのです、と申しました。そして法律

のことも私は解からない。学校を創るという場合にどんな法律があつて、どうやってそれをクリアするのかなど解かりません、と。そうしましたら、生徒の親たちの中から、私は弁護士です、私は公認会計士です、私は何なにが出来ます、という風なことを言う人たちが出て来て、皆が「そちらは我々がやりますから、先生は音楽だけやっていて下さればいいのです」という様なことで持ち上げられてしまったのです。学校の名称も、私は自分の名前がつくのは真つ平御免だったのです。「そんな大責任はとれない」と言ったのですけれども、どうしても「日本人のあなたがやるということが看板にならなければダメだ」ということで、準備会みたいな場で、それが後の理事会になったのですけれども、「アカデミア・ユリコ・クロヌマ」で押し切られてしまったのです。なるべく短い方がよい、と。「アカデミア・デ・ヴィオリン」とか、「バイオリン学校」とか、音楽学校とつけましようとも言ったのですけれども、それも要らない。なるべく短い方がよいということになってしまい、「アカデミア・ユリコ・クロヌマ」という名前の寺子屋の様なものが生まれました。それが1980年10月16日に在メキシコの日本大使館で記者会見を開いて発足したアカデミアです。まだ32年には数ヵ月足りませんが、つい最近、4月の終りか5月の半ばぐらいに「やはりこれ以上は続けられない」という気持ちになり、実は、もう2年前ぐらいからふつふつと私の胸の内にあつたのですが、やっと最終的な決心がつきまして、今年で閉じることに致しました。今年でというのは、今学期でという意味です。メキシコの学期は9月に始まり6月末で終わりますので、今月の30日が最後日という風に決定致しました。

（映像、これらが、メキシコの子供たちが描いた「頑張れ日本！」という児童画です。）

### なぜ閉める決断をしたのか

#### ①国家による無料音楽教育が始まった

なぜ閉める決断をしたかと申しますと、ひとつには、私が数日前に72歳になりましたので、自分の年齢ということもあります。でも、もう1つは、この30年間の間に起こった社会的な変化が、メキシコのみならず世界中で、開校当時は誰も想像出来なかった様な大きな変革が起こってしまっていた、それが一番大きな原因ではないかと思います。

1980年には小さなバイオリンも作っていなかったようなメキシコで、今は2001年からメキシコの政府が文化芸術庁直轄の「音楽振興国立システム」という大きな機関を創設し、メキシコは共和国で32も州がありますが、その各州に少年少女たちのオーケストラを創って、無料で音楽を教育するという方針を打ち出したのです。

それは1980年には夢にも考えられなかったことで、私たちのアカデミアが唯一の子どもたちにバイオリンを教える場であったわけです。私たちは全くプライベートな、日本でいえば私塾みたい

なものですから、生徒たちは月謝を払い、それを先生方に分配して給料のように支払う。そういうシステムでしたので、国から予算がおりて、それこそ 1,000 人を超える単位の子供たちが音楽を勉強するとか、何百人もが何処かの州の大きな宿泊施設に集まって合宿をし、バスを何台も連ねて、幾つもの州を演奏旅行して周るとか、そんな様なことは本当に夢にも考えられなかった変化なのです。それが 2001 年にスタートして、今、11 年目になりました。

そういうことは夢想だに出来なかったのですが、その 1 つの要因というのは、メキシコでは一昨年、100 周年を記念しましたが、1910 年にメキシコ革命というのがありました。なぜメキシコ革命が起きたかといいますと、19 世紀末からポルフィリオ・ディアスという将軍が大統領になって 30 年近く独裁政治、いわゆる絶対に交代をしないで 1 人の大統領が 30 年も政治を動かしていた歴史がありました。それに反対した人たちが革命を起こし、反対するからには大統領の再選は禁止、大統領の任期は 6 年、これを 1917 年の憲法にうたって革命が終わったわけなのですけれども、以降、ずっとメキシコでは大統領は 6 年間しか続けられない。その 6 年が経ちますと、大統領以下、極端に言えば、音楽学校の校長先生から門番までが交替するのです。要するに、大統領が替わると全ての機関がまたゼロに近く戻るようになってしまっ、全く継続性がなくなる。そして前任の大統領とそのグループの人たちは、もちろん次の人たちから否定され、また新しい大統領が次のシステムをつくり出す。

### トラの尻尾よりネズミの頭に

そういうシステムであったのが 1970~80 年代だったので、私はメキシコの国立音楽学校側から教授になって下さいとか、いろいろ頼まれましたけれども、6 年間ではバイオリニストは育てられません、と。私が 6 年教えた後に私と意見を異にする校長先生が来て「あなたのシステムではだめだからこうしなさい」と言われたら、私は生徒の指導を続けられなくなるので、それなら、“トラの尻尾よりネズミの頭”とメキシコでは言うのですが、ネズミの頭でいいから、トラの尻尾にはなりたくない。国立の音楽学校教授というタイトルを戴いても、大統領が替わるたびに違うボスが現れたのでは困るということで、アカデミアを創って、細々ですけれども、頑張ってきたわけです。

先ほども申し上げたように、アカデミアが生まれた頃は、メキシコでは子供たちがバイオリンを弾くなどということは驚異的なことで、まさか 5 歳、6 歳の子どもがバッハのメヌエットを弾くなどとは、ほとんど信じてもらえない状況でしたから、私の友人の新聞記者とかテレビのキャスターとか、そういう方たちから招かれて新聞に載ったりテレビに出たり、随分取りあげられました。そしてそれを見た親御さんたちで「何とか自分の子供にも音楽を学ばせたい」と思っていた方たちが、

「そんな所があるなら」と、大波が押し寄せるようにアカデミアの入学希望者が殺到したのです。

### 小さな住宅で先生 4 人が同時にレッスン

でも本当に、小さな住宅を改造も何もしません。バイオリンという楽器は立って弾けばいいのですから、先生が座る椅子が 1 つと、譜面台が 1 台と、付き添いのお母さんが座る椅子が 1 つあればいい。チェロはまだ始めてなかった。4 ベッドルームがある住宅で 4 人の先生がレッスンを同時にしていたという状況でしたから、最盛期と言いますか、一番生徒が多い頃には 140 名ぐらいいました。

生徒やその親たちは、テレビを観たり、新聞で見たりして入って来て、自分の娘が「可愛いリボンをつけてテレビに出られたから、もういいわ」と止めてしまう、そういう様な生徒たちもいましたし、一度入ったら全然やめてくれなくて、門の外に居る、入りたい人たちのウエイティングリストがどんどん長くなっていくにもかかわらず、退学する生徒がいなければ新入生が入れないという状況でした。

例えば当時は、ちょうど日本とメキシコが経済的にも大変仲よくし出した時で——というのは、メキシコが産油国なので、石油ショックの後には大平総理がメキシコにまで出かけて「原油を日本にも分けて下さい」という様な旅行をなさったりしました。

メキシコのそういう状況の中でしたので、日本から商社とか、銀行とか、製造会社であるとか、様々な会社の社員の方が家族を伴ってメキシコに派遣されていたりしました。そうしますと、日本のそのくらいのジェネレーションのご家庭ですと、娘さんがバイオリン、息子さんがピアノをやっているとか、その逆とか、日本ですでに始めていらした家庭の方が随分メキシコにいらして、「メキシコでも続けさせたいので是非アカデミアに入れて下さい」と。そういうことを伺いますと、やはり優先して差し上げたくなり、日本からいらした方には、なるべく早くアカデミアに入ってもらえる様にしました。

### メキシコと日本の友好の広場に

そして小学校や中学は日本人学校に通っていても、アカデミアに来ればメキシコの子どもたちと一緒に合奏したり、合宿をしたりということで、日本のお子さんたちがメキシコ文化にじかに触れられるようになる。アカデミアを「メキシコと日本の友好の広場みたいになりたい」というのが私の発足当時からの夢でもありましたので、日本の方が常に少なくとも 3 割はいらしていました。100 人の生徒がいれば、30 人は日本の生徒が居た訳です。その方たちが、少しずつ波が引くように日本にお帰りになると、その空いた席にメキシコの子どもたちがワッと入って、そしてなかなか出て行ってくれない生徒が半数ぐらいはありました。

ですから「延べ何人ぐらいのメキシコ人を教えましたか」という質問が時々あるのですが、なかなかその計算は難しいのです。日本で昔、映画館でオールナイトというのがあって、何回映画を続けて観てもいいという、一度座ったら出ないという習慣がありましたけれども、メキシコでも「ペルマネンシア・ボルンタリア」と言って、一度入ったら出ないで十何年もアカデミアに籍を置いていた生徒もいます。またはリボンをつけてテレビに出たからもういいといって半年でやめてしまう生徒もいたので、延べ何人の生徒がアカデミアの門をくぐって出て行ったかと言うのは、計算できないのです。

でも、30年経ちました今、メキシコの楽壇を眺めると、それは私が言うまでもなく、楽団の側のいろんな人たちが「君の所で育ったバイオリニストが来てオーケストラに入った」とか「うちのコンサートマスターはアカデミアの生徒だった」とか、地方に行きましても、突然、知らないバイオリニストに呼びとめられて「僕は昔アカデミアでバイオリンを習っていました」と言われたり、メキシコには知らない所にも沢山アカデミアで元バイオリンをやっていた人たちがいます。海外にもそういう例があって、アカデミアには複文化、バイカルチュラルというか、お父さんとお母さんが違う国籍を持っている家の子も随分来ているのですから、アメリカ人とメキシコ人のお母さんとか、フランス人のお母さんとメキシコ人のお父さんとか。そういう家庭の子どもたちは、もちろん数年でやめて行きますけど、どこかでその生徒がバイオリンを続けて残っていたということが風の便りで耳に入ったり、突然訪ねて来られたりしてびっくりすることもあります。

ついこの間もこんなことがありました。父親がメキシコ人、母親がフランス人の男の子で、アカデミアでバイオリンを始めたのですが、2~3年してフランスに引っ越すので、アカデミアをやめました。その後、全く音信がなかったのですが、その子はパリのコンセルバトワールに入って9年勉強を続け、室内楽と独奏で立派に卒業して、現在は「プロフェッショナルなエディン・クアルデットの第1バイオリンをやっています」と、その元教え子がすでにCDも何枚も録音していて届けに来てくれ、私をびっくりさせたり、喜ばせてくれたり・・・、そんな例もあります。

### メキシコの子どもと出会ってプロになった日本人も

ですから、延べで何人かはわからないのですが、メキシコのみならず、日本からもメキシコの子と出会ったばかりにプロになってしまったというお子さんが何人かいるはずですよ。それは1985年と87年と90年と2005年と、この4回、メキシコのアカデミアの子どもたちを、「1ダース」と言っているのですが、12人連れて日本に来ていますし、1986年と88年と、91年か92年になりますけれども、日本からもメキシコに友好合宿をして、友好コンサートをしにバイオリンを持って海を越

えたお子さんたちがいます。

その人たちの中で、私がその後の足どりは全くつかんでいなかったのだけれども、最近、インターネットのフェイスブックなどで突然、「黒沼先生、私はあのときの合宿したナニナニです」なんていうニュースを発見してびっくりするのです。

そういう意味でも、日本でバイオリンをやっていた方、メキシコに留学したのではないけれども、日本に来たメキシコの子どもたちと一緒に合宿したり、合同演奏したりして「メキシコの子どもたちはなぜあんなに楽しそうにバイオリンが弾けて、私たちはなぜこんなに苦しうにバイオリンのお稽古をしているのかしら」と言っていた様なお子さんたちの中で、プロフェッショナルになった方、またはアマチュアだけれども、ずっと今もバイオリンを手から離さないで、音楽を人生の伴侶として生きているという方がかなり大勢あると思います。

### 25周年は東京芸術劇場で

#### メキシコ人12人+日本人120人の大オーケストラ

2005年にはアカデミアの25周年ということで、やはりメキシコから生徒を12名連れてきましたけれども、池袋の東京芸術劇場の舞台は立錫の余地もないぐらい、120人の日本の弦楽器の若い方、お子さんと青少年、そして12人のメキシコ人ですから、132人の生徒の大オーケストラができましたし、横浜のみなとみらいの大ホールでも同じぐらい日本のお子さんたちとの合同演奏をいたしました。

そういう時に一緒に弾いたというだけの接触しかないお子さんたちも、あの時メキシコの子と弾いたからというのが、どこか彼らの人生の分かれ道の時に何か起点になるようで、メキシコに観光旅行で訪ねてきて私のアカデミアの扉をたたく方もありますし、フェイスブックで発見したりということもあります。

メキシコでは、先ほども申し上げましたがけれども、すでに初期のころの生徒たち、1985年、87年などに日本に12歳とかで来た子どもたちは、もうすでに40歳近いわけですから、もう立派なお父さん、お母さんになって、自分の子どもだけではなくて、生徒たちも教えています。つまり私の孫弟子みたいな小さなバイオリンを弾く子どもが、ネズミ算というとおかしいですけども、私の生徒たちのレッスンによってどんどん増えています。

### 怖いもの知らずの第1回来日演奏旅行は1985年

1985年に、今は第1回といっていますけれども、その時は第1回も2回もなく、まずそんなことが可能だろうかと思うような大胆な発想というとおかしいですが、怖いもの知らずで、12名のアカデミアの生徒を日本に連れてきて、日本の10都市ぐらいで演奏会をしました。

なぜそんな無謀なことをしたかと申しますと、

1982年に大統領になって1年目ぐらいのホセ・ロペス・ポルティョ大統領の時でしたけれども、メキシコの通貨が大暴落をしました。それまでは普通の市民は銀行に、メキシコのペソ建ての預金とドル建ての預金というのを、ほとんどの人が当たり前のように持っていました。一夜にしてそのドル預金は全部凍結されて、翌日、政府が決めたレートでペソで返ってくるという大暴落があって、一夜にして普通の私立の銀行が国営化されてしまったという大事件があったのです。

アカデミアは1980年に始まりましたから82年の頃には、すでにバイオリンを2年やっている子どもたちがいました。バイオリンという楽器は、子どもに靴を与えるとき、小さな靴からだんだん足の大きさにそろえて大きくなるように、楽器が大きくならなければならないのですが、大きくなるというのは大きな楽器にかえなければならない、という意味。ところが、ペソの大暴落の時にいろいろなものが贅沢品として輸入禁止になりました。輸入禁止品目のリストがあって、例えばフランスの高級な香水はもう入らないとか、高級なブランドは入らない。その中に、子どものバイオリンも入ってしまったのです。

### バイオリンを戴いたお礼に演奏

そしてアカデミアで始めた子どもたちに「さあこれからどうしましょう？ もうご飯食べないで、そのままの背丈でいなさい」と言う訳にもいけませんから、バイオリンを始めた子どもたちの楽器を大きくしていくのにハタと困りまして、日本に私が演奏旅行で参りましたときに、日本の新聞、テレビなど、週刊誌もありました、いろいろなところで、「もしもお宅にもう使わなくなった小さなバイオリンがありましたら、メキシコの子どもたちがこういう風に困っているのご寄贈いただけないでしょうか」という、いわばキャンペーンのようなものをさせて頂き、沢山の楽器を日本の皆さんから「メキシコの子どもたちに」とご好意でプレゼントして戴きました。

日本では頂き物には何でも半返しとかいう伝統がありますから、プレゼントを戴いたのでお返ししなければならない。では、バイオリンを戴いたけれども、何をお返ししようか。メキシコから日本にお返しできるようなお金はないので、それではこのバイオリンを弾いて演奏し「こんなにお陰さまでみんな子どもたちがバイオリンを続けられています」という証しのために日本に行って演奏しましょうということになって、初めて12名の子どもを連れてきたのが1985年だったのです。

その1985年に連れてきた12名の子どものうち、50%は現在プロになっています。というのは凄いパーセンテージで、普通はよくて何パーセントではないでしょうか。日本では音楽学校から毎年3,000人とかいう凄い数の卒業生が出ていますが、演奏だけでその後の人生を支えていけるほどのプロフェッショナルとなる人は多分10%以下だ

と思います。もちろん音楽がわかるので、音楽の図書館の司書になったりとか、楽器屋さんで楽譜の係になったりとか、そういう音楽に関係したことで仕事を持っていられる方もありますけれども、自分が勉強した楽器をそのまま弾きながら人生を、家族を持って、家族を支えて暮らせるような、いわゆるプロフェッショナルな人というのは、それほど大きなパーセンテージではないのではないのでしょうか。1985年に日本に来た生徒の中からは50%が現在プロになって、メキシコ、カナダ、アメリカ、イスラエル、ドイツなどで活躍する、バイオリン一丁で家族を養っているバイオリニストになっています。

### 日本で受けた拍手が栄養分となりプロの演奏家に

それはなぜかといいますと、メキシコでは子どものバイオリンの演奏が非常に珍しかったので、「こんなレベルのくせに」と、私などは思いましたが、随分初期の初歩の頃の子どもから大ステージに出させて戴くチャンスがありました。そしてそこには一族郎党、おじいちゃん、おばあちゃんは当然のこと、いこと、はとこに、クラスメートに、とにかくみんながコンサートにやってきて、大拍手、大歓声で、子どもたちを「上手だ、上手だ」と言って褒めてくれたのです。

褒められるというのは誰にとっても大変嬉しいことで、大きなビタミン剤のようなものだと思います。それがまた次のステップへのエネルギーにもなるので、メキシコでは子どもたちが「本当に幸せ」と私は思っていました。日本での先生方の発表会で生徒さんが弾いても、本当にその周囲の少人数の方が集まり、自分たちどうして聴き合って終わりのような雰囲気だった時代に、メキシコでは大ホールで子どもたちが、例えば大学であるとか、政府の社会保険庁であるとか、または芸術院であるとか、そういう公の組織がコンサートを組織して私たちを招いてくださったりする、大変贅沢な環境だったのです。

でも、それだけではなくて、85年に日本に来た子どもたちが何を日本で感じ取ったかといいますと、成田に着いた途端に右も左も解らない。みんなが話している言葉は一切理解できない。その異文化のど真ん中、異文化のたらいの中に落とされてしまったカエルのように、全く右も左もわからない。その子どもたちが心を込めて演奏した各地での演奏会で、日本の皆さんから受けた拍手と激励と、それが何にもかえられない大きな栄養分になって彼らはメキシコに帰ることができたのです。それが、現在、メキシコの代表的な弦楽器奏者になっている子どもたちの1985年の姿でした。

それは、「日本の皆さんにいただいた楽器ありがとう、僕のバイオリンありがとう」というサブタイトルもつけた演奏旅行でしたけれども、むしろ逆に私は「日本の皆さんありがとう。あのお陰でメキシコでは今これだけたくさんの優秀なバイオリニストが生まれました」とお礼を申しあげた

い気持ちでいっぱいです。

### なぜ閉める決断をしたのか

#### ②旧東欧社会主義圏から音楽家が来た

そのアカデミアをなぜこの1カ月前ぐらいに、もう閉じる時期が来たのではないかと決断したかと申しますと、それは先ほども申し上げました様に世の中がガラッと変わった。そのガラッと変わって、私たちが直撃を受けたようになったことの1つが、ミハイル・ゴルバチョフという人が出現して、ソ連を含む、いわゆる東ヨーロッパの社会主義圏の国々が全部資本主義になったということなのです。これは1989年から90年初頭に起こったわけですが、その10年前には誰も夢にも考えられなかったことだったのです。

そしてその結果、何が起こったか。いろいろなことが起こりましたが、それは私たちの様な小さなバイオリンの学校にまで影響を及ぼしたのです。どうしてそんなことが起こり得るかと申しますと、東ヨーロッパの社会主義時代の国々では、“西側の国に出る”ということが非常に難しく、それができたのは科学者か外交官か音楽家、またはボリショイサーカスのような特別な特技を持っている人、またはスポーツ選手だったので、音楽家になりたい若者が沢山いたのです。死ぬほどの思いでまでのぎを削って音楽学校に残って無料で素晴らしい教育を受けたので、沢山の音楽家が輩出されました。

ところが、1995年以降は、そういう国々の文化、または芸術、または音楽に絞っても、それまでであった政府からの予算の配分が急激に減ったために、オーケストラも減り、そして室内オーケストラなどはもちろんのこと、消滅したのもたくさんあります。つまり、職を失った音楽家が続出した訳です。この人たちは今後どうして生きていくかという瀬戸際に立たされて、大変苦しい思いをされたと思いますが、そういう時にメキシコから「音楽家ならどうぞ」という声がかかって、沢山の東ヨーロッパからの音楽家がどっとメキシコに流入してきました。

#### メキシコは外国人に扉を開く国

それは、メキシコという国がおもしろい国で、スペインの市民戦争があった時も、それからそのもっと前、ロシアのボルシェビキ革命の後も、例えばトロツキーが世界中に行く所がなくなった時に、「どうぞおいで下さい」と迎え入れたのもメキシコでした。トロツキーはメキシコで客死しましたが、スペインの市民戦争のときも共和国派の、いわゆる反フランコの人々が続々とメキシコにやってきました。それは、メキシコ政府が「どうぞ」といって門を開いたからであって、このメキシコという国には、フランコが死ぬまではスペイン大使館というのは共和国派の大使館であって、当時のスペインの大使館は存在しなかった、というぐらい頑固な国なのです。

そういうことで外国人がメキシコに来て、何かメキシコのために役に立つ、メキシコの文化をより豊かにしてくれるのであれば「どうぞおいで下さい」という扉を開く、そういう性格がある国なのです。

そのお陰で私も、私がもし日本舞踊をメキシコで教えるならば、当然「日本人から日本舞踊を教わりましょう」ということになりますけれども、日本人でありながら、西洋で生まれたバイオリンという楽器をメキシコ人に教える。それを喜んで手を広げて「どうぞやって下さい」といろいろな便宜を図ってくれた。やはりメキシコというのは大変ユニークな国だと、私は思っています。

#### 音楽家がビザをもらうには

日本でも戦後、オーケストラの主要なパートのトップに外国から演奏家を呼んでオーケストラの発展のために尽くして頂いたりしましたが、何年か経ったら帰って頂いて、やはり「日本のオーケストラだから日本人だけでやる」という風になって来ましたが、メキシコではいまも、ロシア人あり、ブルガリア人あり、ポーランド人あり、ハンガリー人ありと、元社会主義ブロックだった国々から沢山の音楽家が来ています。

その人たちはメキシコに滞在するためには不法入国も不法滞在もできない訳ですから、メキシコの内務省からのビザが要ります。もし、外国人がメキシコで暮らして収入を得たければ、当然、仕事ができるビザをもらわなければ滞在できません。そしてそれはほとんどの場合、公の機関に務めている人が許されることであって、自分勝手に友人を訪ねてメキシコに行ったので、そのままビザを下さいといっても、なかなか長期滞在のビザは出ないのです。半年したら一度国を出て、もう一回観光ビザで入って来るというような難しいことになるのですが、メキシコの国立オーケストラであり、州立オーケストラであり、または市立の学校とか、そういう公なところで就職先が決まれば、ビザが確実に出る訳です。

そうしますと、そういう場所で、例えば「そんなに安い給料しかオファーされないのに、よくそこへ入ったものだ」と傍からは思うこともあるのですが、まず、そのビザを確実にもらって置いて、「あとは何とかアルバイトをして、生活して行こう」と考える音楽家が沢山できたわけです。

#### 音楽家庭教師という新ジャンルの誕生

もちろん仕事をできる許可は学校での指導とか、オーケストラのメンバーとしての演奏でありますけれども、内緒でというのもおかしいですが、自分たちで小さなグループをつくって結婚式とか、お葬式で弾いたりとか。メキシコでは洗礼式とか、赤ん坊が1歳半になるとプレゼンテーション（お披露目）とかいう名目で親がフィエスタをして集まる会があったり、いろいろあるのです。そういうところには必ず生の音楽がなければならぬ。



それもメキシコの特徴ですが、必ず音楽が添えられるのです。レコードではなくてライブ音楽です。そういう所に行って演奏してお金を稼いだりしていました。ところが最近では“音楽家庭教師”という新しいジャンルがみつかったのです。

そうしますと、親と子どもは家にいても先生が来て家でレッスンして下さる。そうすれば車で子どもをアカデミアまで連れて行く必要もないし。アカデミアに車で連れていかなければならないということも日本では理解して頂けないかも知れませんが、親子がバイオリンを持って地下鉄に乗るなどということは、まず考えられないことなのです。子どもの手からバイオリンがひたくられるとか、流しのタクシーに乗って行ったらどこか他所へ連れて行かれるとか、いろいろなメキシコの治安情勢があり、日本では想像できないような状況があるのです。アカデミアに通っていた生徒の親は、運転手を雇っていない家庭では必ず、お母さんか、またはお父さんが会社を休んでレッスンに連れてくる。大会社の社長さんなら運転手をつけて子どもをアカデミアにレッスンに送ったりしていましたけれども。

現在では、家で待っていれば先生が来てくれる。そんなラクなことはないじゃないですか。奥さんが交通渋滞のひどいところへ車を運転して出かける必要もないし、子どもも、学校には家の前からスクールバスに乗って行って、帰って来る時には家の前でスクールバスを降りる。そしたらピアノの先生が何曜日に来て、バイオリンの先生が何曜日に来てということで、自宅で待っていれば音楽の家庭教師に音楽のレッスンをしてもらえる。そういうような状況に変わってきたわけです。

### 125 人いた生徒が 20 人を切った

それで125人いた生徒もだんだん100人になり、90人になり、80人になり、いまは20名を切りました。20名を切っては、とてもアカデミアの建物の家賃も、私のポケットマネーを毎月出さないと払えない、先生方の給料も払えない、秘書だとか、インターネットから、電話代から、電気代から、いろいろかかるわけですから、とても開いて行く可能性が少ない、そういう状況になってしまいました。

ですから、アカデミアがなくなったからといってバイオリンを勉強する生徒の数がすごく減ったかといいますと、もしかしたら家庭教師について私たちの知らないところで随分たくさんの子供たちがバイオリンをやっているかも知れません。

でも、皆さんご存じのように、この10年ぐらいのインターネットの発展は、誰も夢にも思えなかった状況だと思います。子どもたちはインターネットでゲームもしますけれども、遊んで時間をつぶすだけの子どもではなくて、勉強好きな子どもだったら百科事典みたいなもの、ウィキペディアみたいなものは楽しくてしょうがないですから、コンピュータと一緒に過ごす時間の方が、バイオ

リンを練習する時間よりも楽しくなってしまった、そういう子どもも沢山いると思います。それからバイオリンを少しやってみただけでも、とっても難しい。こんなに練習しなければならないなら、と思っていたところで、ちょっと友達が持ってきたエレキギターを弾いてみたら「何だ、こんな易しいならすぐ弾けるさ」と言って、クラシックの音楽からロック音楽に飛び移ってしまった。そういうようなケースもありますし、とにかく時代が変わりました。

ということで、これからは私がアカデミアにいて生徒が来るのを待っているのではなく、もしかしたら、私が、家庭教師ではないですけども、先ほども申しあげた、国が作っているナショナルの少年少女オーケストラというのが、メキシコの各地にできていますので、そういう所で指導者の指導をする、要するに指導者を養成するコースを作って欲しい、というような誘い話もあります。むしろ私が出向いて行ってメキシコの国のために複数の、アカデミアみたいな小さなシステムではなくて、沢山のオーケストラとか、音楽学校とか、そういう所に出かけて行って何か役に立てることがあるのなら「喜んで」と申してあります。

### 日本からのバイオリンはメキシコで生き続ける

その音楽振興国家システムに、日本から戴いたまだ100丁ぐらい残っているバイオリン、ピアノ、チェロなどを寄附して、——それは在メキシコの日本大使も多分同席して下さると思いますが——日本の国民からメキシコの国民に、または日本の子どもからメキシコの子どもに、と公式に受け渡しをして、アカデミアの校舎からそれらの楽器は出て行くことになりました。そうしますと地方で1つの楽器を複数の子どもが使って、ますます役に立ってくれることになりますので、これが最良の活躍の場ではないかと思います。

ですから、日本からバイオリンを寄附して下さった方々がアカデミアが閉まるというニュースをごらんになった時に、もしかして「自分の楽器はどうなるのだろうか」と心配なさる方もあると思いますが、頂戴した楽器は、こうしてまだまだ生き続けて十分に活躍し、活動し、複数の子どもたちの手に渡りながら、ずっとこれからもメキシコで生きて行くと思いますので、改めてもう一度、メキシコの名で感謝しております。

### 日本に来てバイオリニストになる決心をした アドリアン・ユストゥス

(映像を見ながら) 彼はアドリアン・ユストゥスといって、日本でももう大勢のファンで出てきて、「ファンクラブを作らないのですか」などと訊かれています。メキシコのアカデミアから生まれた、1985年に日本に来て、そしてバイオリンが大好きになって、バイオリニストになる決心をした、いまイスラエルに住んで大活躍しているバイオリニストです。



この子は、今もう 42 歳になりましたけれども、85 年にバイオリンのケースを右手に、左手にはテニスのラケットを持って日本に来たのです。テニスが大好きで「日本の演奏旅行から帰ったらすぐに重要なトーナメントがあるから、マエストロ（先生）、日本でもテニスコートを借りて練習させてくれないと困るんだ」などとクレームをつけられて、八ヶ岳であるとか、東京でもどこかテニスコートを借りて、テニスの上手だったもう一人の先生と一緒に付き合っただけで戴いたりしました。日本でサラサーテの「ツィゴイネルワイゼン」をオーケストラ伴奏で初めて弾いて、その時の日本の聴衆から戴いた拍手の反応と自分のオーケストラと弾いた時の醍醐味と、その 2 つがマッチして、どうしてもバイオリニストになる決心をしたのが、日本だったのです。

帰りの飛行機の中ではもうほとんどラケットを持って来たことを忘れそうになるくらい、バイオリン、バイオリン、バイオリンと思っていて、今も日本に来ますと、記者会見などで「自分はメキシコで生まれたけれども、バイオリニストとして生まれたのは日本です」とか、「日本でスイッチが入り、それまではオフでした。それがオンになったのは日本です」とか、そんな風に言っています。

これは、2010 年にメキシコ音楽祭を日本でしまして、その時の画像だと思いますが、私の後ろとか隣りで弾いていた、こちらにいるバイオリニストは、みんな昔の教え子たちで、当時、すでにアカデミアの教師になっていました。こちら側の 2 人のピアノ奏者は、もとアカデミアに行って指導して下さった日本人の先生であつたり、チェロを弾いているのは、チェロ科のアカデミアの先生であつたり、つまりアカデミアの大家族みたいな合奏団。「ソリスト・メヒコ・ハボン」といって、「メキシコと日本の独奏者たち」という名前の弦楽合奏を連れてきたときの映像です。

その後、これが 2010 年でしたが、昨年の 2011 年とことしの 2012 年に今度はアドリアン・ユストゥスだけのリサイタルを 2 回続けて麴町の紀尾井ホールでしておりますけれども、この音楽祭で初めて彼の演奏を聞いたときからファンになった方々が、必ずその 2 回にも来て下さって、彼のファンになっている方が多いです。

そして昨年の秋には、昨年の 1 月にしたリサイタルのライブ録音をレコードにして「ラ・カンパネラ」という名前で出ていますし、ことし 1 月に演奏しましたパガニーニの無伴奏のバイオリンの大変難しい「カプリース 24 曲」を全曲、一晩で弾いた、それも今 CD にしようと思って編集しているところです。

### 夢にも思わなかった皇后さまとの再会

この時には皇后様もおいで下さいました。なぜ皇后様がおいで下さったかと言いますと、1985 年の第 1 回の訪日演奏旅行の時、メキシコの子ども

に日本の子どもたちがバイオリンを下さったということに皇后様が非常に感動なさってご臨席くださいました。当時は皇太子様ご夫妻だったのですが、今の天皇皇后両陛下です。そして 1985 年から二十何年たって、アドリアン・ユストゥスが日本に演奏会に来てソリストになり、そして後で弾いているバイオリンの奏者たちも皆ほとんどが、その 85 年の参加者だったので、皇后様がお会い下さいました。本当に歴史というのは経ってみるまでわからないもので、1985 年には夢にも思わなかった場面が、2010 年と 11 年、この東京で私は実際にみたり感じたりすることができて、大変感慨無量でした。

### 実は世界で愛されるメキシコの歌

この日本でのメキシコ音楽祭には、この合奏団、アカデミアの元生徒たちと先生方の合奏団のほかに、歌手を 2 人連れてきました。それは團伊玖磨の「夕鶴」という有名なオペラをメキシコの歌手たちが日本語で 2005 年にメキシコ初演したので、それを 2008 年に日本に持ってきて公演し、本場で日本語で聴いて頂いた時の主役の 2 人でした。

「夕鶴」は、つうと与ひょうという、ソプラノとテノールが主役なのですが、そのソプラノとテノールを連れてきて、ソプラノの人には有名な「エストレージャ」とか、「フラメ」とか、テノールの人には「グラナダ」とか、「時計をとめて」とか、「ソラメンテ・ウナ・ベス（たった一度だけ）」とか、日本でも大変有名なメキシコの歌を歌ってもらいました。

メキシコのこういう歌をフランク・シナトラとか、エルビス・プレスリーなども歌いましたので、英語で歌っているのを聞いて流行したものですから、日本ではアメリカの歌だとばかり思われていたようですが、実はメキシコの作曲家の歌が世界中に広まっていた訳です。「ベサメ・ムーチョ」というのはメキシコの歌だと皆さんご存知かと思いますが、「グラナダ」などはスペインの歌だと思っていられ方も沢山あります。

そういう意味でもメキシコが、クラシック音楽もですが、いわゆるポピュラーな音楽にも世界で非常に大きな貢献をしているというか、愛されていて、それはメキシコという国の文化の中では、音楽には塀がない、バリアがないということを象徴しているのです。日本では「それはポピュラー歌手が歌う歌ではないですか」と言われるような歌を、プラシド・ドミンゴとかラモン・バルガスとか、現在、世界的に有名になっているメキシコのテノール歌手なども当たり前前にレコーディングして、世界中で出されているのです。

メキシコは 16 世紀にスペインに征服され、日本より 350 年も前からバイオリンとギターが持ち込まれて西洋音階が入り、そしてオルガンが製作され、19 世紀には、明治維新になる前に生まれたメキシコのピアニストがヨーロッパまで演奏旅行に行ったり、音楽の勉強に行ったりしているという

ような、日本では想像もつかないと思いますが、大変日本とは異なったクラシック音楽の伝統があるのです。

### メキシコ音楽祭をもう一度日本で

もしかしたら来年か再来年、もう一度メキシコ音楽祭を日本でできたらと思っていますが、その時には日本の方々にメキシコの作品を弾いて頂きたいと思っていますし、歌も聴いて頂きたいです。

(歌)

先ほどバイオリンを弾いていたアドリアン・ユストゥスが今年の1月にパガニーニというイタリアの大バイオリニストが作曲した、技術的に一番バイオリンで難しい超絶技巧の曲といわれる曲を一晚で弾いたのですが、例えば、その演奏が日本の方には非常に新鮮に映ったのは、この曲を日本ではまるでテクニックを勉強するための練習曲のように思われていたのですが、彼が、今お聞きになったあの歌のように、バイオリンで弾きながら、まるで歌を歌っているように、しかも弦を2本、3本と一緒に弾きますから、1人で弾きながら二重唱とか三重唱の歌を歌っているように弾いたのです。それが日本の聴衆にはびっくりするように新鮮だったということがありました。

今年それはレコードにして出しますけれども、例えば有名なルジェロ・リッチとかイツァーク・パールマンとかのレーコーディングでは1枚のCDに全部入ってしまうのですが、彼の演奏ですと1枚では入り切れない。20分ぐらい余計にかかってしまうので、2枚のCDに分けて出すことにしています。

### 音楽が歌になってしまう

それはなぜかと言いますと、さっきお聞き頂いたような、ああいう歌、つまりポピュラーな歌とクラシック音楽とが、先ほど申しましたように壁が高くある別々なものではなくて、歌詞のついたああいう歌が自然に、両方並行して存在していると言うとおかしいでしょうが、何と言ったらいいいのでしょうか……。普通に両立して存在するのです。歌が大好きな国民と言えるかもしれません。ですから、弦楽器奏者でもピアニストでも、器楽で弾いても音楽が歌になってしまう。そういう説明が一番簡単かもしれませんね。

ちょっとこれをお聞きになったらいいかしら。これは「ソリスト・メヒコ・ハボン」というアカデミアの元・生徒たちと先生たちの弦楽合奏団です。イギリスのベンジャミン・ブリテンという作曲家の曲をなぜメキシコ音楽祭で弾いたかといいますと、やはり日本では皆さんご存じの曲を聞いた時にその演奏家の技量が判るというようなことも聞いたので、ではブリテンの「シンプル・シンフォニー」をやりたいということで、これは第二楽章の全曲ピツィカートのところですよ。

(演奏)

こんなブリテンの曲もやったりして、この合奏団の技量は日本で大変皆さんに高く評価していただけたのですけれども、もう1つ聞いて頂きたいのは、例えばさっきのテノール歌手が歌っている——例えばこの歌は「時計をとめて」というタイトルで日本でもアイ・ジョージですか誰ですが歌っていた非常に有名な歌ですが、彼はオペラ歌手で……。これはメキシコの作曲家がつくった歌なのです。

(歌)

ご存じですか、この歌。有名ですよ。でも、メキシコの歌だっただけでいいですか？ 多分アメリカの歌だと思っていらないかと思えます。これはロベルト・カントラルというメキシコの作曲家がつくった歌で、一世を風靡しました。日本では「時計をとめて」。

「グラナダ」という歌が日本では非常に有名だと思いますけれども、これはプラシド・ドミンゴなんかが必ず歌っていますけれども……。

いま、世界のオペラ界で大活躍しているテノールの歌手がメキシコ人で4〜5人います。テノールだけでなくバスも、メトロポリタンオペラなどで専属で契約された歌手として活躍していますけれども、この人がオペラ「夕鶴」の与ひょうを歌った人です。

これは「ソラメンテ・ウナ・ベス」、これも日本で有名な歌だと思います。

(歌)

次の曲。

(歌)

この「グラナダ」を創ったアグスティン・ララという人は、200曲ではきかないほど歌をつくっています。世界中で本当に有名な歌が、実はメキシコの作曲家による曲だったということを今日、皆さんにお伝えして私のつまらない話を終わらせて頂きます。時間になりましたので。有難うございました。

### 《質疑応答》

**司会** どうもありがとうございます。もっと映像と音楽を楽しみたいところではありますが、ぜひ質問にもお答えいただきたいと思います。今のお話だと、32年間、世界が変わって、メキシコも変わって、アカデミアも変わっていったという、グローバリズムといいますが、地球のあらゆるところに変化が広がっているような印象も受けましたが、ご質問のある方はどうぞ。

**質問** 日本では文化予算がなかなか組めなくなって、ヨーロッパでもなかなか音楽に予算が投じられないという話も聞くのですが、メキシコでは黒沼さんの学校が閉鎖するぐらい国が力を入れている。それについては、どういうふうと考えればいいのか。つまり、なぜメキシコはそれほど音楽

とか文化に力を入れているのか。もう1つは、日本ではバイオリンを目指す人は、例えばこのコンクールを目指すとか、この音楽大学を目指すとか、そういうことでテクニックを磨くのがよく行われていると思うのですが、その点はメキシコではどのようなことなのか。その2点をお尋ねできればと思います。

### メキシコの音楽教育システムは音楽の力の大発見

**黒沼** 2001年からメキシコが政府を挙げてやり出した音楽振興のための国立システムというのは——システムというのはスペイン語では「システム」というのですが——カリブ海に面したベネズエラという産油国がありますね。ベネズエラで「エル・システム」という通称になりましたが、国を挙げての子どもへの音楽教育が開始されました。それはもう35年前ぐらいで、メキシコのように大統領期が6年ではなかったのですが、続いたわけですが、これは青少年が非行に走らないように、そして麻薬などに染まらないようにという国の目的があって、それを、バイオリンをたくさん地方の子どもに使えるようにして音楽教育をしましょうと始めたのがベネズエラ方式。エル・システム・ベネゾラーノというのですが、ベネズエラ方式といわれて、今ラテンアメリカでいろんな国が注目し始めています。

メキシコでは2001年からやっとそれに着目してというか、やはりメキシコの青少年の非行を防止するために、音楽の教育がいかに大事であるかということを政府が認めたわけです。ですから、私が始めた32年前には本当に私たちは政府から一銭の援助も得ないで20年間続けたわけですが、大きな組織を作って、沢山の人がメキシコのシステム・ナショナル・デ・フォメント・ムシカル、その組織に入って動いて、メキシコ全体をカバーするような大運動になりつつあります。

それはやはり貧しい子どもたちが非行に走らないようにというのは大変大きなキーポイントで、日本のような豊かな国では想像もつかない状況ではないかと思います。ですから、音楽によって青少年が幸せになり、しかも社会もそれによって安定してきたりというのは、音楽が持つすごい力。ただ楽しむだけではなく、慰められるだけではなく、音楽が持っている力の本領が発揮されている大発見。日本などでは使われていない力の、威力の大発見ではないかと思います。

### 言葉では説明がつかないものを記憶する能力

もう1つの、日本ではバイオリンをやって音楽学校に入るとか、コンクールに出るとかが目的となっているということは、メキシコでは、もちろん国内のナショナル・バイオリン・コンクールなどもありますし、音楽学校もあります。国立の音楽学校は入学金なし。無料です。そういう国立の音楽学校にも、先ほど申しあげたように東ヨーロッパで勉強した音楽家たちが続々と先生になって

入ってきていますから、相当にいい教育も無料で受けられるようになりました。

でも、メキシコでは楽器を勉強するというのが、自分個人で上手になって、それで成功するためには、思いながら勉強する人はごく少ないと思います。ほとんどの場合、楽器が弾けるようになって音楽を自分で演奏しながら楽しみたいというのが目的。そういう人が非常に多いので、アカデミアを通して行った子どもたちの中には、沢山のアマチュア・バイオリニストでプロフェッショナルになった人がいます。プロフェッショナルになったというのは、つまり医者になったり、弁護士や建築家、公認会計士になったり、いろいろな職業の専門家になった元生徒たちが沢山います。

それはおそらく音楽教育が持つもう1つの力、非行に走らないとか、楽しむだけではなく、音楽を勉強することによって小さな子どもに集中力を植えつけることができるとか、具象ではなくて、何だか意味がわからないもの、要するに言葉があって覚えるのではなくて、メロディーであるとかハーモニーであるとか、言葉では説明がつかないものを記憶できる、暗譜できる、暗記できる、そういう能力を子どもに小さい時から訓練して磨きをかけているということが、その後にそれぞれが進む道、数学であり、科学であり、医学であり、そういうところに非常に役に立っているのではないかと私は思います。

### アインシュタインを抜いた教え子

ひとつ、一番最近の面白いケースも申し上げますけれども、私の生徒で17年もバイオリンをやっていた少年がいますが、その子は遅く11歳から始めたと思います。今27歳だと思いますが、物理学の博士号を取りました。それだけではなく、昨年度のノーベル物理学賞をとったイギリスの物理学者が、若い学者から論文を取り寄せて自分の助手のように同じ研究所で一緒に物理の研究を進めたい人を募集したところ、私の元の教え子とその勝利を勝ち取りまして、というとおかしいですが、その物理学者のめがねにかなって、今年の9月からイギリスのマンチェスター大学の研究所に行けることになりました。つまり就職するような形。フェローシップというか、研究さえしていれば生活費を出してもらえという条件でイギリスに行くことになりました。

この生徒は私の所ですでにメンデルスゾーン、チャイコフスキー、ブラームス、プロコフィエフなどのバイオリンコンチェルトを勉強しています。疑いもなく皆さんご存じのアルバート・アインシュタイン、物理学者の神様のアインシュタインはバイオリンを弾いていました。でも、アインシュタインのバイオリンの技術というのは、モーツァルトのソナタが弾けるとか、ハイドンのクアルテットと一緒にみんなと弾いて楽しむとか、その程度という失礼ですが、クラシックの曲が弾ける程度だったのですが、彼、私の教え子は、

ロマン派から現代音楽までも弾けてしまうので、確実にアインシュタインを抜いたという風に皆が言っています。「バイオリンではね」という但し書きがつくので、今度イギリスに渡ったら「物理でアインシュタインを抜いて来い」というのが私たちの励まし言葉になっています。

**質問** メキシコというと、前回もここで大統領が会見したとき（カルデロン大統領、2010年2月2日）は、ちょうど大量殺りくが本国であり、麻薬に絡んでさまざまな事件が山積しているところでした。治安の悪さについての思い出があれば聞かせてください。

### 麻薬はアメリカに運べば売れるから

**黒沼** 先ほど中井さんにもお見せしたのですが、私のハンドバックの中には必ずいつもパスポートが入っています。これは、日本では必要ないと思いますけれども、メキシコでは家を出るときには必ずそのハンドバックを持って歩きます。今日、家に帰れるかどうか分からないからです。もしも帰れない時や何かあった時に、やはりパスポートというのは不可欠。自分の身分を証明するためにも必要ですし、どこかに飛ばなければならないかもしれないし。そういうメキシコの治安の状況については、日本ではほとんど皆さんご想像できないだろうと思います。大量殺りくもありましたし、いまの大統領は軍隊を非常に活用し始めて、警察だけではなくて、軍隊がハイウエーの要所、要所で車を止めて、トランクの中を全部あけてみたりします。

それがいいか悪いかは別ですけれども、根本的になぜ麻薬がこれだけ重要な題目として騒がれているかと言いますと、麻薬が売れるからなのです。アメリカに運べば売れるのです。もしアメリカに運んでも売れなかったら、誰が危険を冒して運びますか？という根本的なことをもっと政治家たちは考える必要があると思います。

### 戦争と結び付いたアメリカの麻薬

アメリカのオバマ大統領初め歴代の大統領すべてがメキシコを非難して、メキシコ人が麻薬を運ぶ、またはメキシコはアメリカと地続きですから、まずコロンビアとか南米の国の人々が麻薬をメキシコに運んで、メキシコから徐々にアメリカに密輸するというルートがある訳ですけれども、メキシコとアメリカの国境の間には何キロにもわたったトンネルまで出来ているそうです。人が立って歩けたり、線路もついているというような話もありますけれども、そんなトンネルがどうして作れたのか。メキシコ人がただモグラミたいに掘ったから出来たのではなくて、アメリカ側がそれを許しているから出来たのであって、メキシコ人だけが麻薬を輸出しているのではなくて、アメリカ人が輸入しているからなのです。

アメリカには、やはり麻薬がなければ生きて行けないという人の人口があまりにも多い。ですから売れる訳で、売れなければ腐ってしまって捨てるものですね。果物だって売れなければ腐るのです。

では、麻薬がアメリカでなぜそんなに必要不可欠な薬であるかという、それは恐らくベトナム戦争からこちら、そしてイラク戦争・・・、とにかくアメリカの兵士たちが戦争に行き人殺すためには、麻薬が配られている筈なのです。吸うか注射するか知りませんが、麻薬でもしなければ普通の人間は、目の前に来た人間を殺せないと思います。やはり頭が麻薬で狂っているから目の前の女・子どもを、無差別に殺すことができるのだと思います。

ですから、アメリカが完全に戦争しなくなって何十年もたって、そういう兵士たちが全部死に絶えた時になって初めて、アメリカに麻薬を輸出しても売れなくなるのではないかと思うのです。

根源はそういう風に深いのであって、アメリカの政治家ももちろんそれを知っていて、それから国境警察とか国境を守っている軍隊であるとか、その人たちが黙認しているから麻薬がアメリカに入るのであって、そうでなければ完全にシャットアウトされると思います。

なぜその人たちが認めているかといえ、先ほども申しあげたように、それが売れるからなのです。

**司会** 予定の時間は来たのですが、もしほかにご質問があればどうぞ。

**黒沼** もしまだお時間があって、音楽をお聞きになりたい方があったら、どうぞメキシコの歌をたくさんお聞きください。（笑）

### 1961年、プラハ生まれのバイオリン

**質問** 先生は公式の音楽会などではどんなバイオリンをお使いでしょうか。もし差し支えなかったら教えていただければと思います。

**黒沼** 私が使っているバイオリンは、1961年製のプラハで生まれたバイオリンです。この人はブシェミスル・オタカール・シュピードレンという名前で、ヨーロッパにあります新生バイオリンの国際コンクールで必ず金賞を取ってしまったバイオリンメーカーといいますが、バイオリン製作者で、当時の新聞には「イタリアのストラディバリはプラハに引っ越した」というような記事が沢山ありました。

ですから、61年製ですから50年経っているのでしょうか。知らない間にそんなになりましたけれども。私は自分でバイオリンを持っていなかったもので、先生から楽器をお借りしてプラハに留学したのが1958年ですけれども、いつまでも先生の楽器をお借りしているわけにいかない、その著明な楽器製作者の方に作って頂きました。その

バイオリンをいまだに使っています。

### 陸前高田で流された木で作ったバイオリン

バイオリンという楽器にはいろいろな神話がありまして、200年経たないといい音が出ないとか、ストラディバリでなければとか、グアルネリでなければいけないとか言われていますけれども、他方では「弘法筆を選ばず」という言葉はバイオリンにも当てはまって、例えば、あの3.11の陸前高田で壊された家が立派な木造の家でしたが、海に流されて、それがまた帰って来た。その木材を使ってバイオリンを作られた方があります。

大変有名な、世界的なバイオリニストが自分の楽器の調整に日本までみえるくらいの中澤(宗幸)さんという日本のバイオリンメーカーの方ですが、この方が陸前高田の現場にいらして、絶句をして、そしてバイオリンメーカーの方ですから、木をみて、「あ、これは何とかなりそうだ」という木をお持ち帰りになって、バイオリンを作られました。彼はイタリアのクレモナという17世紀からバイオリン製作で一番世界的に有名であったところで勉強なさった方ですが、当時バイオリンを作った木というのは、カルパチ山脈あたりの木材を船に載せて運んだのではなくて、いかだのように木を船につないで海の中を流しながらイタリアに運んだので、潮水を吸った木を使ってストラディバリとかグアルネリは作られていたということをご存じなので、陸前高田の木が津波で海に一たん流れ、そしてまた帰ってきた、それを持ち帰られてバイオリンを作られました。

この楽器については多分NHKのテレビでも出たと思いますが、一本松のマークが楽器の後ろについていて、中澤さんは、これから1,000の色を出してもらいたい。1,000人。つまり1,000人という多数の、いくらでも、何千人でもいいから、いろんな人にこのバイオリンを弾いてもらいたい。そして日本の復興のために祈って戴く、そして日本の被災された方たちを励まして戴く、そういう役目もありますが、そのバイオリンをいろんな人が弾き続けることによって、どんな楽器になるだろうか、どんな音を出すようになるだろうかという大実験をしていらいっしゃいます。

そういう訳で、私のバイオリンはやっと50年ですけれども、1961年から弾いているチェコのプラハで生まれたバイオリンです。

**司会** 最後に1つ質問させてください。アカデミア・ユリコ・クロヌマという大きなプロジェクトを一人の民間の個人の力でずっと続けてこられて、しかもメキシコという土地で続けてこられて、途中で「もう嫌だ、やめたい」と思われたこともあったのではないかと想像します。それでもあきらめずに続けてきた最後の支えというか、最後のとりでみたいな思いは何だったのですか。

### 悪い状況だから何かしようと思った

**黒沼** それはやはり私が音楽を愛しているから。その一言に尽きると思いますが、メキシコには、先ほど(日本記者クラブの)記念帳に書いて下さいと言われて、私は何を書こうかと思って考えていたのですが、これから書きたいと思っているのは、メキシコの言い伝えみたいな、日本でいえば諺みたいな言い方があるのですけれども、「悪いことは良いことのためにしかやって来ない」というもののなのです。

メキシコに私が行きました1960年から70年の頃、メキシコでは子どもがバイオリンなんて弾いていなかった。そんな野蛮な国みたいに思おうと思えば思えた訳です。日本ではもう2歳、3歳からバイオリンをやって、何十万人の子どもがバイオリンをやっていた時代です。

そういう悪い状況にあったから何かしようと思った。要するに、「悪いことは良いことのために、良いことに発展するためにある」という言い方なのです。私が自分で自分の人生を歩み始めたのは18歳でプラハに行った時からかもしれませんが、それ以来ずっと私の人生は、常にマイナーな条件にさらされていました。そのマイナーな条件をいかにメジャーにするかというのが、常にいつも頭のどこかにありました。ネガティブなことをいかにポジティブにするか、です。

### ネガティブをいかにポジティブにするか

私がチェコに行きました時には、日本ではまだまだ外国に行ける学生などほんとに少数で、日本の国内コンクールで1位になった方などは次々毎年出ますから、その方たちはパリに行ったり、ニューヨークに行ったり、ベルリンに行ったり、ウィーンであるとか、いわゆる西の社会の音楽の都に行っていました。

私は家庭がそんなに裕福ではなかったし、西側の国に留学した生徒というのは親からの仕送り、しかも闇ドルを買った仕送りがなければ続けれられないような状況の1950年代の話です。

当時チェコスロバキアといいましたが、チェコスロバキアの政府から、奨学金を普通の労働者が働くのと同じ額を出します、そして医療はすべて100%無料です、もちろん学費は無料です、というような条件で新聞に出た公募をみて申し込み、私は、選抜試験に受かってチェコに行きましたけれども、当時は「鉄のカーテンの向こうに娘さんをやるんですか」と父や母はみんなから言われたそうです。

つまり、やはりパリに行く、ウィーンに行くなどというお嬢さんを持った方とは全く別な、いわばネガティブな状況だったのですけれども、チェコから帰ってきて、私はチェコという国がいかにヨーロッパの中でも音楽の都であったか、そしてチェコが輩出した音楽家のすばらしい——皆さんご存じのドボルザークとか、スメタナとかいう作

曲家のほかにもすばらしい音楽家がたくさんいる、そのチェコの作品を日本に紹介する、つまりマイナーなことをメジャーにしていくために一生懸命日本でもチェコの音楽を紹介しました。それからチェコに行って、外国人と結婚するなどということは当時は全くなくて、毎日新聞にも出ましたけれども、日本の音楽家で外人と結婚したのは穂吉（あきよし）敏子さんという有名なジャズピアニストだけで、黒沼ユリ子は2人目だというような記事が出ましたけれども、チェコに行って、チェコ人、またはチェコに近いドイツ人と結婚したのであったらば、もしかしたら若気の至りで仕方ないだろうと思われたかもしれないけれども、チェコに行ってメキシコ人と結婚したということで、これもまた大変ネガティブな印象を皆さんに与えたと思います。

日本では、ソングレロをかぶってピストルを持っているようなメキシコ人、そんな野蛮人と結婚するなんて何ぞやという反応が一番大きかったのですが、メキシコに行ってみたら何のその、メキシコのすごい歴史、紀元前からの歴史もあり、現在、現時点でのメキシコの科学のレベルとか、芸術のレベルの高さに、私自身も驚きましたし、それを今度は日本に紹介したいという気持ちに追い立てられて、今度はメキシコという国を日本の皆さんに何とかしてポジティブに知らせたいという気持ちになって今までやってきた訳です。

### 「悪いことは良いことのためにしかやってこない」

そんなことで、「悪いことは良いことのためにしかやって来ない」。No hay mal que por bien no venga. それはメキシコ人の気質をあらわしていると思います。いろんな大波小波の自分にはどうしようもない不可抗力な不幸というのは人生の中にもあるし、歴史の中にもあると思います。

メキシコでも、さっき申しあげた1982年の通貨の大暴落。さあ大変。フランスのコニャックは飲めないし、フランスの香水はつけられないなどと言っている大金持ちの奥さん方を尻目に、いわゆる庶民は「ああ、お豆と唐辛子とトウモロコシがあれば別にいいじゃないの」と。別に「フランス料理が食べたい、と言わなくたって人生やっていけるじゃないの」という考え方もあって、国民全体はそんなに大騒ぎしなかったですね。

そういう意味でネガティブなこともポジティブになることがあるというのが原動力ではなかったかと思います。

**司会** きょうはすばらしいお話を伺うことができて、どうもありがとうございました。どうぞ皆さん、盛大な拍手をお願いします。（拍手）

（文責・編集部）